

# 主体的に英語で自分の思いや考えを伝え合い、喜びを感じられる子どもの育成 ～小学校の学びを中学校につなげる外国語科小中連携の取り組み～

熊本市立出水南小学校 教諭 横手佳菜子

## 要約

本実践は、昨年度1年間を通して実施した小中連携の取り組みをまとめた。目的・場面・状況に応じた本物の言語活動を通し、子どもたちが主体的に伝え合おうとする小中連携の授業を実践した。また、小学校の学びを中学校につなげ、円滑な小中接続を目指した。本実践を通して、子ども達が英語で思いを伝える喜びを感じ、その結果、英語が好きになる子どもが増えることが分かった。また、小中連携を行うことで、小学校の学びを中学校で生かしていると実感している生徒が多いことが明らかになった。

---

<キーワード> 小中連携 小中接続 つなげる 目的・場面・状況 zoom 交流

---

## 1 主題設定について

### (1) 今日の課題より

文部科学省の令和4年度英語教育実施状況調査によると小中連携している学校は全国でも本市でも約8割の中学校が「小学校と連携している」と回答しており、「情報交換」についても6割を超える中学校が実施していると回答している。しかし、「交流」（指導方法等についての検討会、研究協議、交換授業）についての項目では、本市の割合は3割以下であり、全国よりも17.7ポイントも下がっていた。さらに、「カリキュラムや学習到達目標」の項目は、2割にも満たず、全国的にも難しい現状にあるという結果であった。本市の教育課程研修でも指摘されていたが、「情報交換」にとどまらず、「交流」や「カリキュラム作成」など次のステップへ改善できることが、小学校の学びを中学校の学びに生かすことにつながると感じた。

また、令和5年度全国学力・学習状況調査の中学3年生英語の分析結果からは、「書くこと」と、「話すこと」の正答率が低い結果が出ていた。報告書によると、小学校と中学校の外国語科の目標などの差から文法や読み書きの習得で生徒たちのつまづきがあるが、目的・場面・状況と関連させて書くことや、小中接続がうまくいけば、生徒たちも書くことができるようになる、との考察であった。さらに、「話すこと」については、「情報や考えなどを即座にやり取りしたり、相手の発話の内容を踏まえて、それに関連した質問や意見を述べたりして、会話を継続させていくことに課題がある」という結果が出ている。このことから、小学校でもその場に応じて質問できるよう、日頃の授業でSmall Talkなどを通し、継続的にやり取りをする機会を増やすことで、小中接続がスムーズにいくと感じた。中学3年生の目指す姿より、小学校外国語教育に何が必要であるか分析し、小中連携をしていくことが必要だと感じた。

### (2) 外国語専科の立場より

私は、これまで中学校の英語教諭として指導をしてきたが、小学校へ異動し5年が経った。中学校と小学校の両方の経験から、小中連携は必須であると感じてきた。私自身、中学校指導経験より、定期考査や受験などを意識するあまり、ドリル的な反復練習に偏りがちであったため、「知識・技能」中心の授業をしてしまった反省がある。暗記をせざるを得ない授業から英語嫌いを作ってしまったように感じる。

小学校に異動して、自分自身の使命の1つは小中連携を図ることだと感じ、外国語の指導を行っている。中学1年生と小学6年生を中心に、単元ゴールやSmall Talkをはじめ、言語活動や言語材料などカ

リキュラムを共有することで、円滑な小中接続につながると考えた。そのためにも、まずは小学校と中学校の教員同士がつながりを持ち、情報共有をしていくことが必須である。小中両校種の教員が小中連携についてどのように考え、必要感や困り感をもっているのか、また、どのような取り組みが可能なのか、把握する必要があると感じた。生徒指導や部活動指導、進路指導など中学校の現場の多忙化は十分理解している。無理のない、持続可能な連携をするためにも、目的や計画、方法など見通しをもち、両校種の指導を生かしながら連携していく必要があると感じた。

### (3) 令和5年度 6年生児童の実態より

昨年度(令和5年度)本校の6年生児童は、私が本校に赴任した令和4年度の5年生の時から2年間指導した。英語を好きだと答える児童が多く在籍する。一方で、嫌いだと感じている児童も一定数いる。また、中学校へ進学することに対しては、楽しみだが心配だという児童を含め、心配に感じている児童が56%と過半数を超えていた(図1)。不安な要素の中には、「勉強」と答えた児童が最も多く、「友達」も心配だと答える児童がいた(図2)。本校は、出水中学校、出水南中学校の2つの中学校に進学する校区であるため、多少の不安もあるのかもしれない。

外国語の授業を通して、英語が好き、自分の思いや考えを伝え合いたい!そして中学校への進学が少しでも楽しみだと思えるように、小小連携での横のつながりを学期に1回程度実施できたらと考えた。同じ中学校校区の小学校同士で共通の指導案で同じ単元ゴールに向かって学習に取り組むことも、小中連携につながる。また、小小連携での実践を中学校にも共有することで、スムーズな小中接続につながると考えた。年間を通し、小小連携の実践を行い、小学校の学びを中学校につなげる小中連携の取り組みを行った。

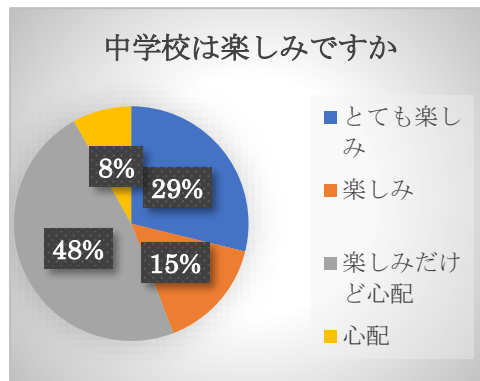
## 2 実践の実際

### (1) 1学期 自己紹介動画交流の取り組み

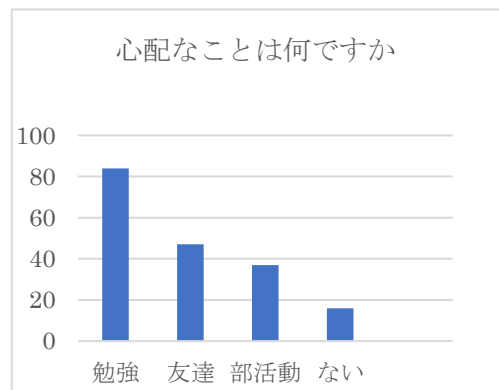
#### ① 内容と目的

本実践は、6年生のUnit3 What do you want to watch?の単元で自分たちの好きなスポーツや、ゲーム、食べ物など単元で扱うフレーズを交えて、自己紹介ビデオを作成した(図3)。動画による「話すこと(発表)」の領域で扱った。単元ゴールは、「校区の小学校の友達に自己紹介をして仲良くなろう!」と子どもたちと考え、本来の6時間設定に加え、まとめや動画鑑賞の2時間余剰を加えて8時間扱いで実施した。本単元は、1学期最後の単元で、出水南中学校校区の画図小学校の6年生、5クラスとの動画交流を行った。6年生最初の他校との交流であったため、まずは、動画による交流を実施することにした。

本実践の目的は、同じ校区の6年生の児童が外国語学習を通して、お互いのことを知り合う機会をもつことである。また、同じ単元ゴールに向かって、共通のカリキュラムで学習することにより、中学校での学びにつなげていくことができると考えた。



【図1 実態調査】



【図2 実態調査】



【図3 動画作成の様子】

## ② 授業の実際

### ア パフォーマンス課題の設定

単元の導入では、専科とALTとで自己紹介ビデオを送り合った。子どもたちは、画図小学校の先生からのビデオだと分かり、とても喜んでいて、「実際に行きたい!」や「zoom 交流したい!」と言い出す児童もいた。単元ゴールを子どもたちと設定すると、早く動画を作りたいという意見があがり、相手意識が高まっていることを感じた。児童の中には、習い事などで相手校の児童との交流がある子どももあり、共通の話題として会話の中にも出てきているようで楽しみにしている様子だった。

【表1 Unit3 単元計画】

指導と評価の計画（8時間取り扱い 本時1/8）				
課題	次	時	主たる学習活動	評価する内容と方法等
同じ校区の友達と自己紹介をして仲良くなるろう!	1	1	●単元ゴールを考える スポーツの言い方を知る	
	2	2	○～したいですか。の言い方を知る。自分たちの発表の出だしを考え伝える。	【思】シンキングツール
		3	○何を～したいですか。の言い方を知る。自分たちの発表の中身を考えて伝える。	【思】シンキングツール
	3	4	○構成を考えて、班で練習をする。	【思】ルーブリック B2
		5	○さらによくできるよう工夫して練習し、撮影する。	【思】ルーブリック B1
		6	○さらに工夫して撮影できるように練習し、撮影する。	【思】【主】発表撮影
	4	7	○動画作成まとめ	【思】【主】発表撮影
		8	○鑑賞会	【思】【主】発表

### イ 単元ゴールに向けての取り組み

表1が示すように、第2時～3時までは、単元で学ぶ表現について教科書を中心に学んでいった。ジェスチャーゲームでは、自分が見たいスポーツについて、ジェスチャーも交えながら、お互い表現していった。実際、スポーツについて自己紹介した児童は、身振り手振りも入れながら自分の好きなスポーツについて動画に撮ることができた。学んだ表現を元にしなが、既習の表現も交え、自分たちがどんな話題で動画を作っていきたいか、思考ツールを活用しながら考えをまとめていった。

第4時からは、班で構成を考えながら、撮影を始めた。授業の導入は必ず Small Talk を実施し、動画で使える表現を中心に会話から始めていった。スポーツやアニメ、ゲーム、食べ物など盛り上がりそうな話題を選んだ。1時間ごとの工夫や改善点をクラスで共有しながら動画を作成していった。会った事のない友達に自分たちのことを伝えるためにどうしたらよいのか、真剣に考える姿があった。自分たちのことを知ってほしい、仲良くなりたいという目的が明確であり、相手意識が高まっていくのを感じた。

### ウ 実際の動画交流と子どもたちの振り返り

動画を交換する手段として、ロイロノートを使用した。動画を提出箱に提出し、その動画をお互いの学校で教師の管理の下、鑑賞することができるようにした(図4)。さらに、感想交流もできるように、感想の提出箱も作り、両校の子どもたちの感想を共有した。お互いの良いところを発見することができ、相手から学びとる振り返りや、中学校で会えるのが楽しみだという意見が多く聞かれた。子どもたちの振り返りより一部を紹介する。



【図4 動画交流の様子】

・みんな楽しそうにしているので見ているこちらまで楽しくなっていました。まさに魔法です。み

なさんの動画を見て、自分たちにも修正できる部分は何個も見つかりました。中学校に入ったら、会いましょう！その時は仲良くしましょう！

・僕は見ていて、「えっすご！英語が上手！」と思ひびっくりしました。動画だったけど目の前で話しているかのようなようでした。画図小学校の人と早く友達になりたいと思いました。

### ③ 連携の方法と実際

本単元は、6月中旬より実施予定の交流であったが、画図小の専科教員とは、学期始めの4月より計画を練り始めた。主に teams で連絡を行い、内容や交流方法の打ち合わせを重ね、5月初旬に計画実施案を送付した。管理職の先生方からも確認を取っていただき、正式に実施が決定した。5月下旬には、導入ビデオをお互いに確認し合い、指導案を共有し、同じ単元ゴールや指導内容で授業を展開していった。また、授業内で Small Talk や思考ツールについても共有し、連携を図った。評価については、ループリックにて動画を評価した。お互いの進捗状況や様子なども報告し合い、その都度本校の児童にも知らせることで、単元ゴールに向けて、相手意識や目的をもち続けることができたように感じる。

## (2) 2学期 クイズ大会 zoom 交流の取り組み

### ① 内容と目的

本実践は、6年生の Unit5 He is famous. She is great. の単元で、これまで学んだ表現を用いて、自分たちの紹介や好きな有名人のクイズ大会を zoom にて実施した。「話すこと（発表）」の領域で扱った。単元ゴールは、「校区の小学校の友達とクイズ大会をして、仲良くなろう！」と子どもたちと考え、6時間扱いで実施した。本単元は、2学期10月頃の単元で、出水中学校校区の出水小学校と砂取小学校、6年生8クラスで交流した。1学期の動画交流の感想より、「zoom で交流したい、実際に会ってみたい」などの意見があったことから、2学期の交流は zoom でクイズ交流会を実施することにした。3校の8学級が zoom 上で一同に会し、各学級の代表クイズを出していく方法で交流会を行った。

本実践の目的は、同じ校区の6年生の児童が外国語学習を通して、お互いのことを知り合う機会をもち、仲良くなることである。また、3校で連携し、同じ単元ゴールに向かって共通の指導案で学習することにより、中学校での学びにつなげていくことができる。交流を通して、中学校へ進学することを楽しみに感じてほしいと思った。また、小小連携を通し、同じ単元ゴールや指導法で学習することで、中学校への外国語学習につなげていきたいと考えた。

### ② 授業の実際

【表2 Unit5 単元計画】

指導と評価の計画（6時間取り扱い 本時1/6）				
課題	次	時	主たる学習活動	評価する内容と方法等
同じ校区の友達と仲良くなるためにクイズ大会をしよう！	1	1	●単元ゴールを考える。職業や性格の言い方を知る クイズに出す人物を考える。	
	2	2	○職業や性格を伝え合う。 自分のクイズに出す人の職業や性格を考え伝える。	【思】シンキングツール
	3	3	○出身地やできることの言い方を復習し、クイズを作る。 自分のクイズの中身を考えて伝える。	【思】シンキングツール
	3	4	○班でクイズ大会をする。	【思】ループリック B
	5	5	○さらによくなるよう工夫して練習し、代表クイズを決める。	【思】ループリック A
	6	6	○zoom 交流会 クイズ大会 質問大会	【思】【主】発表

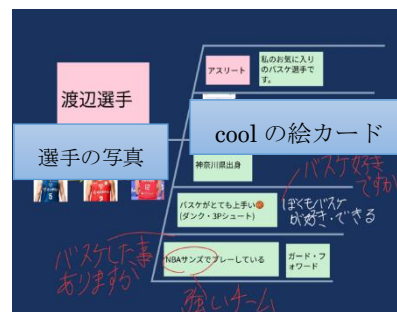


## ア パフォーマンス課題の設定

単元の導入では、各学校の代表教員が、自己紹介を交えた有名人の誰でしょうクイズのビデオを送り合った。子どもたちは、誰からのビデオなのか、興味津々で見ている。学校の風景やメッセージから出水小、砂取小の先生たちからのビデオだと分かり、先生からのクイズに対し、喜んで画面に答えていた。動画を見終えると、即座に「早くクイズを作りたい、自分は〇〇のクイズを作ろう」、などすでに考え始める児童もいた。今回は、出水中学校校区の友達と交流することに対しても喜んでいて。子どもたちと、どんな表現が使われていたか、どんな表現を学んだら、クイズができそうか、対話しながら単元の見通しを気づかせていった。子どもたちの中には、5年生で学習した身近なあこがれの人を紹介するUnit 9の単元と似ていることも気付いていた。1時間目からそれぞれクイズに出す人物を考えながら、楽しい気持ちをもちつつ、次の時間への課題を考えた。

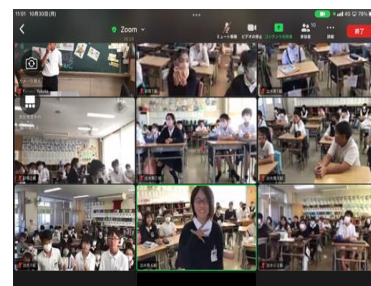
## イ 単元ゴールに向けての取り組み

表2が示すように、第2～3時では、5年生で学んだ「～ができる」や職業や性格の表現、6年生で学んだ出身地や得意なことを表す表現を復習した。本単元は、既習表現を取り扱う単元であることから、表現を想起できるよう、以前の学習で使用した絵カード使用し指導した。それらの表現を用いて、クイズの人物のヒントとなる表現を思考ツールにまとめていった。始めはクラゲチャートでヒントを作っていたが、ヒントを出す順番などを工夫すると、くまでチャートを用いた方がよいと気づく子どもが現れた。



【図5 思考ツール】

交流までの最後の2時間は、各グループでクイズを練り上げていった。個に応じ、少しずつヒントとなる表現を加えていった。思考の変容が分かるよう色を変えたり、手書きで加えたり表現を少しずつ工夫していった(図5)。本番前には、学級でのクイズ大会を実施し、学級代表を1グループ選出した。

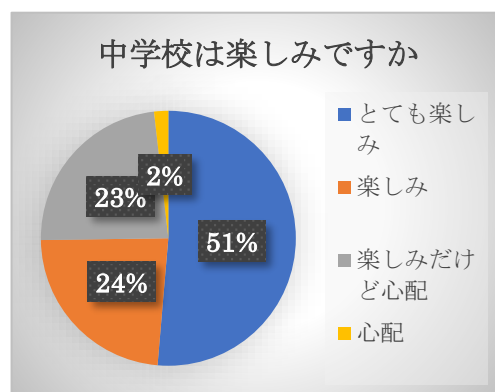


【図6 zoom 交流の様子】

## ウ 実際の交流と子どもたちの振り返り

本番の zoom クイズ大会は、本校の英語委員会の児童を中心に司会進行を務め実施した。始めの言葉やめあて、諸注意など子どもたちが自ら打ち合わせを実施し、決めていった。各学級の発表時間を3分程度に設定し、簡単な自己紹介のあとクイズを出していった。画面上の交流であるため、全員参加できるよう、問いかけには手で○や×など、回答には指で1、2、3を表し、全員が楽しめるよう工夫した。

実際のクイズ交流は大変盛り上がった(図6)。各学校や学級の工夫もあり、子どもたちは大変学びの多い交流になった。事後アンケートからは、3校どの学級も有意義な時間になり、友達から学ぶことが多く、もっと英語を学習したい、また交流したい、早く会いたい、仲良くなりたい、という回答が多かった。さらに、以前は中学校が心配な児童が多かったが、楽しみだという児童が75%を超える結果となった(図7)。



・英語は得意ではなかったけど、このクイズ大会を通して少しだけ **得意になった** 気がしてよかったです。 【図7 アンケート結果】

・英語が **伝わってとても楽しかった** です。知らない英語を **もっと知りたい** です。

・みんなとしっかり **英語が学べてとても楽しかった** です。中学生になって早く会いたいです。

- ・英語でまた交流したいと思いました。次はブレイクアウト交流などでもっと仲を深めたいです。
- ・好きなことや得意なことが似ている人もたくさんいたので中学校でも仲良く友達になりたいです。

### ③ 連携の方法と実際

本単元は2学期10月の交流であったため、夏休み中に計画を作成し、2校の外国語担当と連絡を取り始めた。2学期に3校でteamsグループを作成し、指導案や計画などを送付した。その際、Small Talkの内容や思考ツール、絵カード等の教材や指導方法等も共通で実践することにした。小小連携を行った授業実践及び振り返り等について中学校への情報共有を行い小中連携にもつなげることができた。

また、今回の交流が一斉のzoom交流であるため、準備、運営、進行については、入念に打ち合わせを行った。ハウリングが起きない工夫や、全員参加形式で実施するなど、子どもたちがやってよかったと思えるように、3校で知恵を出し合い協力して実施することができた。さらに、事前事後アンケートを共有することにより集計の効率化を図り、即座に子どもたちへフィードバックできるよう工夫した。評価に関しては、本番のzoom交流では行わず、事前のクラス発表会の際に評価した。

## (3) 3学期 将来について zoom ブレイクアウト交流の取り組み

### ① 内容と目的

本実践では、Unit9 Junior High School Life の単元で、中学校でがんばりたいことや将来の夢などを扱う題材で、校区の友達と将来についてブレイクアウト交流を実施した。「話すこと（やり取り）」の領域で扱った。昨年度の全国小学校英語実践研究会では、本実践の研究授業を発表させていただいた。

2学期のクイズ交流からの事後アンケートにて、3校の子どもたちは、また交流したいとの意見が多く聞かれた。実際に会ってみたいという意見も多数あったため、3学期はzoomにてブレイクアウト交流をすることにした。子どもたちは、いよいよ小学校卒業を目前に控え、不安と期待の入り混じる複雑な時期を迎えていた。子どもたちには、中学校を楽しみに希望をもち入学してほしい、小学校の外国語の学習を中学校でもつなげてほしい、そんな思いでブレイクアウト交流を実施した。

### ② 授業の実際

#### ア パフォーマンス課題の設定

子どもたちに中学校に対して、楽しみな気持ちになってもらおうと、出水南中学校より学校紹介ビデオを作成してもらった(図8)。小中連携の観点から中学1年生の教材の学校案内や友達紹介などを単元ゴールに中学校紹介、先生紹介のビデオを作成してもらい、子どもたちに見せた。子どもたちは、席を立ちあがって興奮して見ていた。出水中学校の紹介は、ALTと作成した部活動の紹介ビデオを見せた(図9)。子どもたちにとって、中学校で楽しみなことの1つは、部活動である。進学予定の中学校の紹介ビデオを見ると、子どもたちは、「中学生と交流したい!」や「また、他校の小学生と交流したい!」など単元ゴールを楽しみにする姿が多く見られた。そこで、今回は、中学生や校区の小学生と仲良くなるために、中学校でがんばりたいことなどについて交流することを子どもたちと考え、単元ゴールに設定した。

イ 単元ゴールに向けての取り組み



【図8 学校紹介動画】

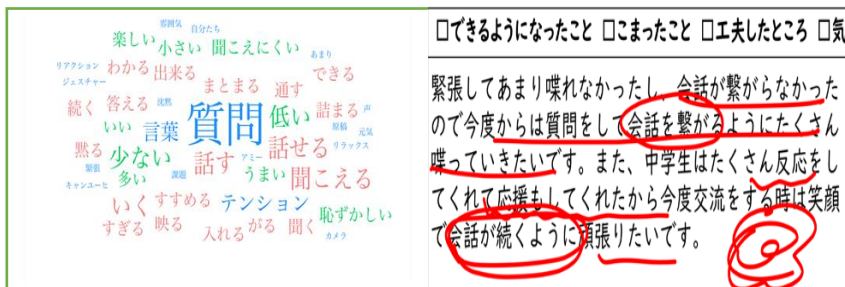


【図9 部活動紹介動画】

第2～3時は部活動の言い方や入りたい部活動、頑張りたい教科などの表現を学習した。その際、教科書掲載の部活動に加え、出水南中、出水中に実際にある部活動名も一緒に学習した。第5時では、中間ゴールとして、実際に出水南中の1年生と zoom でブレイクアウト交流を行った(図10)。中学生との zoom 交流を経て、課題が明確になってきた。子どもたちが考える課題は何か、テキストマイニングで AI 調査を行った結果、「質問」という言葉がどのクラスでも多く上がってきた(図11)。振り返りからも、話し続ける工夫が必要だ、という課題が見えてきたことで、子どもたちは、質問を考えたり、さらに話を広げたり、工夫し始めた。中学生とのやり取りで伝わらないもどかしさなどを体験することによって、新たな課題を発見し、最終ゴールである校区の小学生との交流に向けて、子どもたちはさらに主体的に学びを深めることができた。



【図10 中学生と zoom 交流】



【図11 児童の振り返り】

#### ウ 実際の交流と子どもたちの振り返り

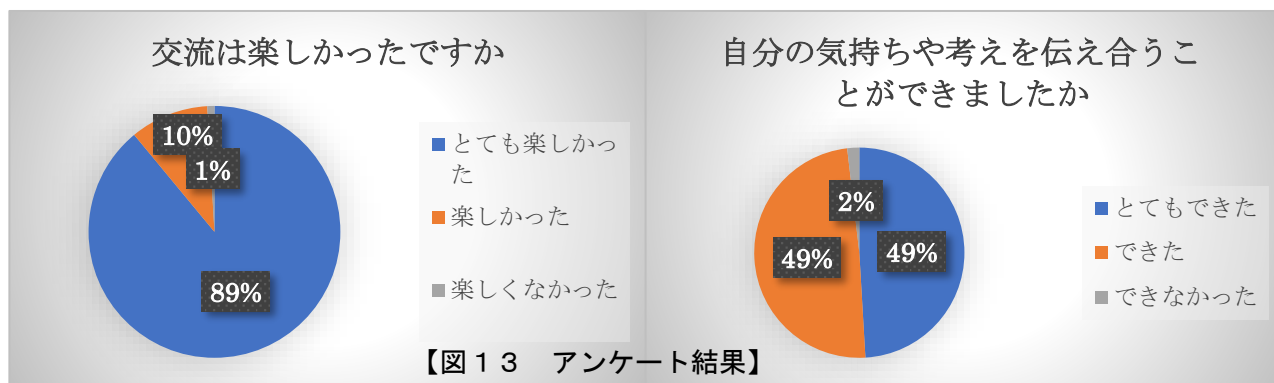
今回の交流はブレイクアウト交流であったため、各学校の各学級同士をマッチングし、学級ごとのブレイクアウト交流を実施した(図12)。学級ごとの交流にすることで、より少人数で密な交流をすることができた。zoomをつなげた後、実際にブレイクアウト交流を行った時間は約20分であったが、子どもたちは自己紹介から始まり、中



【図12 砂取小と zoom 交流】

学校でがんばりたいことについての会話やお互いへの質問など、時間いっぱい会話を続けることができた。そのほとんどを英語でやり取りすることができ、日本人同士でも、英語でも会話をする価値を子どもたちは見出しているように感じた。子どもたちのアンケート結果や振り返りからは、相手を知ること、伝わる喜びを感じた感想が書かれていた(図13)。

- ・ 言ったことを OK? と確認したり、分からなかったら One more time, please. と言ったりして、相手のことを知る ことができました。もっと英語が上手になりたい と思いました。
- ・ 1つの質問が終わっても色々な質問を考え、ずっと話し続ける ことができた。日本語での会話もそこを意識して仲良くなっていけそうだな と思いました。
- ・ 伝わらなかったり、分からなかったりしたけど、伝わったときが とても楽しく、うれしかった です。



【図13 アンケート結果】



### ③ 連携の方法と実際

本単元は小学校最後の単元を2月の全国小学校英語実践研究会の研究授業として実施したため、通常よりも早く、3学期始まってすぐの1月より実施した。本校以外の2校は、通常通り、2月より単元の学習を開始した。単元ゴールのブレイクアウト交流は、他校の進度に合わせ、3月の中旬に実施する計画で、本校のみ先に学習を開始し、先行授業を実施する形での取り組みとなった。

2学期の交流から引き続き、3校の教員同士の連絡や指導案共有などはteamsにて行い、先行実施していた本校の実践についても報告しながら、授業を進めていった。今回も指導案の他にSmall Talkや思考ツールを共有し、さらにルーブリックなど評価方法についても共有した。指導内容や指導法のつながりを意識して指導を行うことにより、小中連携にもつながっていくと思い連携していった。

本番のブレイクアウト交流では、各学級2～3名ずつ、10班に分かれ、お互いの学校のグループごとにブレイクアウトルームに入室し、合計5～6名で交流した。ハウリング防止のため、教室を3つほど使用し、1教室3グループで分かれて交流した。始めの挨拶をした後、各教室に移動し交流を20分、最後に感想交流を実施し、合計30分の交流会とした。また、事後アンケートも実施し、お互いの感想を共有した。評価に関しては、公平性を保つため、交流後にALTとのやり取りを実施した。

さらに、学びを中学校とつなげるために、本単元で学習した内容を終末に中学校に向けての自己紹介シート作成を行い、中学校の授業開きの際に、実際の自己紹介で使えるよう出水南中校区、出水中校区6校全ての小学校共通の連携を行った。

### (4) 教員の小中連携

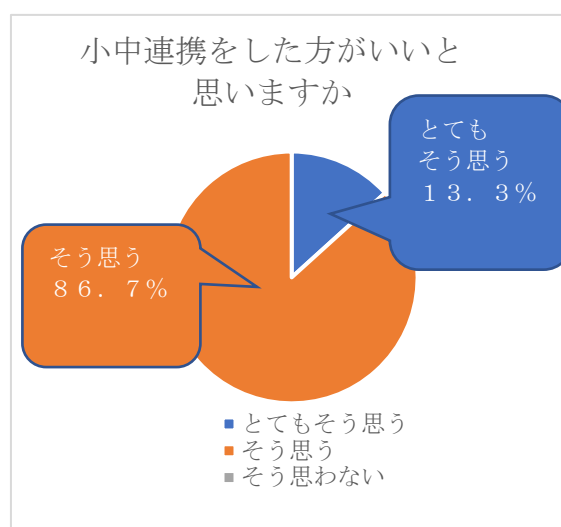
小学校と中学校の外国語科担当教員の小中連携を日頃から校区で行うことにより、より密な情報交換ができると考えた。幼小中連携の日を活用し、情報交換を行い、昨年度から新たに①外国語担当者teams発足②実態調査③カリキュラム、指導法の共有の3点について取り組んだ。

#### ① 外国語担当者teams発足

出水中学校区、出水南中校区それぞれに、中学校の外国語科担当者よりteamsを作ってもらい、校区での取り組みなどについて共有したり、ALTの計画について意見交換したりできるようになった。情報を簡単に共有できるteamsの活用は大変効果的であり、実態調査やカリキュラム等の共有もすべてteams内でやり取りをすることができた。年に数回の幼小中連携の日だけでは、難しかった情報共有が大変円滑に進めることができた。

#### ② 実態調査

校区の小中の教員がどのように外国語教育について、小中連携について考えているのか、実態調査を実施した。小中連携をした方がよいという意見は100%であった(図14)。表3が示すように、小中連携をする目的としては、中1ギャップの解消や学習指導上の効果を上げるため、という意見が上位にあがった。また、実際にどのような取り組みができるか、実施したがよいか、という問いには、小中の授業参観、Small Talkの話題を共有、小中の年間指導内容を把握などが挙げた。「書くこと」の指導については、小学校でも実施しているが、学習指導要領の範囲内で行うべきであるとする。小学校外国



【図14 アンケート結果】



語教育が、決して中学校の前倒しになるような指導になってはいけないと感じる。実態調査を踏まえ、今後の取り組みの展望などが見えてきた。結果を元に、昨年度から本年度にかけて、さらに校区の外国語教育の充実を図っていきたいと考えている。

③ 中学校とのカリキュラムや指導法の共有  
アンケート実施より、小中連携に対する困難さの1つに、中学校の多忙化が浮き彫りになった。小中連携は、大事だとわかっているが、中学校の置かれている状況から、幼小中連携の日にて情報交換は可能だが、カリキュラム作成や指導法の共有には困難さが生じていた。そこで、昨年度は小中で共通する指導内容や言語材料、さらに単元ゴールや Small Talk の内容をまとめ、各学校に共有した。

【表3 小中連携についての実態調査】

① 小中連携をした方がいいと思うか	
とてもそう思う	13.3%
そう思う	86.7%
② 目的は (上位)	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・中1ギャップ解消のため</li> <li>・学習指導上の成果をあげるため</li> </ul>	
③ どんな取り組みができるか・実施した方がいいか	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・書くことの指導を小学校でも</li> <li>・小中の情報交換・授業参観</li> <li>・Small Talk などの話題を共有</li> <li>・小中の年間指導内容を把握</li> <li>・小学校の専科もしくは、教科担任制</li> </ul>	

### 3 実践の成果と課題

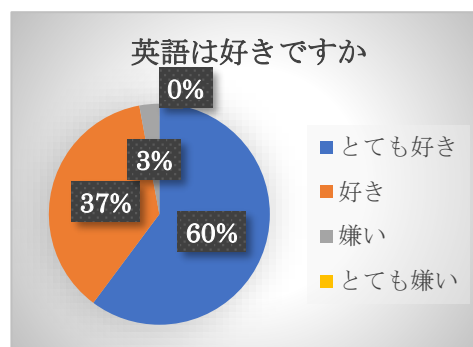
#### (1) 成果

##### ①卒業時の事後アンケートより

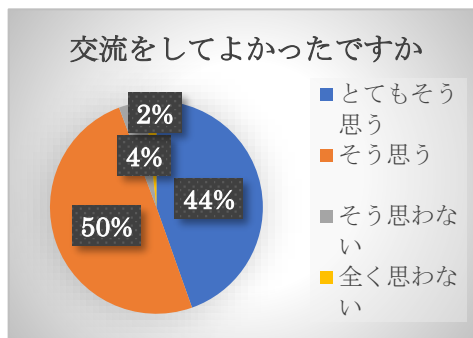
卒業前の3月に、外国語についてのアンケートを実施した。英語を好きだと答えた児童は97%であった(図15)。子どもたちが6年生当初に実施したアンケートでは90%であったが、卒業時に97%まで増えたことは、大きな成果であった。交流を始め、目的・場面・状況が明確な本物の言語活動を通して英語を学ぶことにより、子どもたちは英語が好きだと思っているのだと考察する。英語を学ぶ理由については、将来必要になる、世界の人々と友達になりたいと感じている児童が多かった。また、年間を通して実施した中学校で実際に会う友達との交流が子どもたちにとって貴重な経験であり、必然性のある活動であったために、主体的に伝え合う姿が見られたと感じた。

##### ②中学生になった子どもたちの意見より

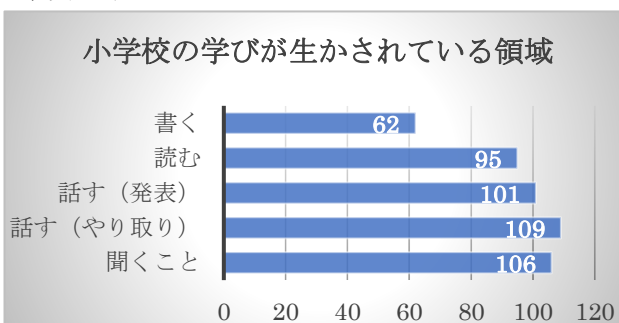
本実践の子どもたちが、中学校に入学後の6月中旬、出水中学校1年生を対象に、事後アンケートを実施した。昨年度の取り組みが中学校の学びにどう影響しているのか、生かされているのか、追跡調査を行った。その結果94%以上の子どもたちが、中学校入学後も交流などを通して学んだ経験が有意義であったと答えた(図16)。さらに小学校の学びが中学校の学びにつながっていると感じていた。特に「話すこと」と「聞くこと」の学習経験は、中学校の学習に生かされていると回答していた(図17)。



【図15 アンケート結果】



【図16 アンケート結果】



【図17 アンケート結果】

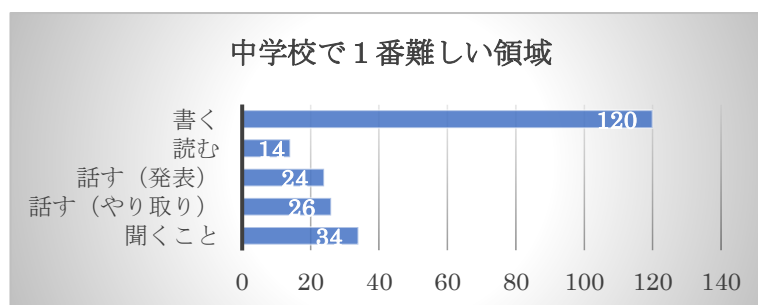
## (2) 課題

### ①昨年度の取り組みより

小小連携や小中連携の実践は、決して容易ことではなかった。課題の1つとして、2つの中学校区6校全ての小学校が同じように連携することは、大変厳しい。各学校の指導計画や学校行事等の調整など、解決すべき点があった。また、動画交流やzoom交流を行う際、肖像権やプライバシーに関することについても慎重に確認する必要もある。様々な制約のために、交流を断念せざるを得ない場合もあるだろう。しかし、本年度より改定された小学校外国語の教科書には、ICTを活用した他校や海外との交流について多くの実践例が掲載されている。今後、持続可能で子どもたちが自分の思いを伝えられるような交流ができるよう、取り組みを考えたい。

### ②中学生の子どもたちの意見より

中学校に入学した昨年度の6年生の追跡調査より、生徒たちにとって、中学校で一番難しい領域は、「書くこと」であった(図18)。多くの中学生が、小中の「書くこと」の学習についての相違点を書いていた。



【図18 アンケート結果】

中学校で突如書くことが増え、戸惑っているといった声が多く聞かれた。まさしく中1ギャップである。小学校では、書き写し程度であったものが中学校で難易度があがり、その格差に戸惑っているのだった。中学校の「書くこと」の学習は、ドリル的な練習も必要であるが、自分の考えや気持ちなど、伝えたいことを書くといった、目的・場面・状況に応じた必然性のある「書くこと」のバランスが必要なのかもしれない。小学校の「書くこと」の指導は、学習指導要領に基づき、産出ではなく書き写し程度に留め、小6と中1で、その格差を少しでも減らせるような取り組みを小中で連携し、考えていく必要があると強く感じた。

## 4 おわりに

小学校の外国語教育が必修科目になり10年以上経過し、教科化になり5年目を迎える。昨年度の全国小学校英語実践研究会熊本大会では、子どもが学びとる授業の展開について考える機会をいただいた。今後も、子どもたちが主体的に自分の気持ちや思いを伝え合えるような本物の言語活動を通して、英語を学ぶことのできる授業を行っていきたい。また、小学校の学びを中学校につなげることができるよう、小中連携を密に行い、子どもたちの学びが継続できるようにしていく必要があると考えている。

現在は週2時間、年間70時間の小学校外国語の授業であるが、中学校に進学すると2倍の週4時間、年間140時間となる。中学校3年間で、どの教科よりも外国語の授業時数が多い。今後も、目的・場面・状況に応じた本物の言語活動を通し、必然性を感じながら主体的に楽しく学んでほしい。そして、他者と関わりながら協働し、言葉が伝わる、心が通じる喜びを感じてほしいと願っている。

## 5 参考文献

- 1) 金森強 (2022) 『教室から世界へ羽ばたく英語プロジェクト型学習』 教育出版
- 2) 直山木綿子 (2021) 『小学校外国語教育の指導と評価』 文溪堂
- 3) 中嶋洋一 (2023) 『授業デザイン力を高める3つの力』 大修館書店
- 4) 文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領解説 外国語編』
- 5) 文部科学省 国立教育政策研究所 (2023) 『令和5年度全国学力・学習状況調査 報告書』